

徳山藩府幕末・維新の残照

会員 山 神 利 勝

はじめにかえて

太古には流木に跨り、時代を経て、開墾や帆船建造により大陸樹林は伐採され尽くされ、十字軍時代からヨーロッパ人の東漸が始まり、イギリスは1600年東インド会社を設立。大陸とほどよい距離の島国・日本は内戦に明け暮れ、関ヶ原の後に、江戸に徳川幕府が開府され、中国八ヶ国の太守・毛利氏は長門・周防に押し込まれ、長州藩は、当初、下松支藩（寛永十一年（1634）に舟倉を設置（下松浦から遠石町東端浦、さらには三田尻へ移転）。館構築も見ず、野上の地に移転して徳山と改め、徳山藩（慶安三年（1650）と称した。

1641年、幕府の鎖国政策（オランダ・清国や朝鮮通信使は別）。1767年ワットが蒸気機関改良。1770年イギリス産業革命。1787年、ジョン・フイッチ蒸気船発明。ロシア船の日本近海出沒やペリヤ艦隊来航（実は、アメリカ・清国航路の水・石炭補給港交渉の予定が、米・西（メキシコ）戦争の勃発で再航は遅れ・・・）。一方、薩長の尊皇攘夷論は沸騰し、徳川幕府の大政奉還により明治維新（慶応四年（1868）を迎えた。

徳山藩の幕末・維新と下松での出来事等々、「徳山藩府幕末・維新の残照」と題し、掲載（第41集）してい

ただいた。

「毛利元就」・「閥閥録」^{ほつろうく}・他によると、毛利家の遠祖は大江広元。武蔵国毛利之庄を領地とし、後に安芸国吉田郷に移った。応永の乱で世は乱れ、毛利家中興の祖・元就誕生。尼子氏 vs. 大内氏、さらには大友氏との挟間で只管、毛利家存続に腐心する日々。大内義弘（二五代）は戦に斃れ、大内義隆（三一代）は文治派（相良武任）を重用した為、陶晴賢が反旗を翻し、天文二十年（1551）義隆は大津郡・大寧寺で自刃、ここに大内氏惣子系の歴史の幕は閉じた。

石見国津和野の吉見正頼は陶晴賢の不臣を責め、毛利元就もこれに与みして弘治元年（1555）陶晴賢を嚴島に討ち、防長両国進攻。山代道沿いを吉川元春、海岸沿いは小早川隆景の二手で防長路を西進。山代道沿いは大内氏砦も多く、吉川軍は沼城（現周南市須々万）攻略に手間取ったが、小早川軍も加勢し、沼地に竹を組んで足場をつくり、沼城を落とし、中国八ヶ国を平定した。

元就は弘治三年（1557）十一月一日に輝元（元就の孫）・吉川元春（元就の二男）・小早川隆景（元就の三男）に宛てて一四箇条もの長文を認めたことが今日に伝わっている。

従って、周防国富田・勝栄寺で認められた三矢の教えは、後世の作り話と思われる。

永禄一〇年（1567）二月九日、病氣治療にあたった曲直瀬道三^{まなせどうざん}は、元就から出雲国内見聞の褒貶^{ほうへん}を腹藏なく注進するよう求められ、和漢の古典を引用、為政者としての治国の政道についての心得を九箇条にまとめた序文、「武威天下無双、下民憐慈の文徳は未だ」を注進した。

その後、永禄一二年（1569）に大内輝弘挙兵。大内家の再興運動にほかならず、後世に与えた影響は大きいものがあつた。なお、輝弘の「輝」は十三代將軍足利義輝の偏諱。「弘」は大内氏の通字の一つ。十月十日、大友水軍の助力で秋穂に上陸。十月十二日、山口に入り、築山（大内氏館跡）を占拠、高嶺城（毛利氏の防長支配

の中心的な城郭)を包围、攻撃を加える。一時的にせよ大内家の再興を象徴する出来事だったが、大きな誤算は、高嶺城を落城させることができなかったこと。輝弘勢は山陽道をさらに東進し、浮野峠を経て富海へ向かう。しかし、富海にも船はなく、樁峠を越えてきた杉元相(大内氏の旧臣)軍勢に遮られ、引き返し茶臼山へ。十月一三日、津和野の吉見氏や九州から引き返した吉川氏ら毛利勢と各地で交戦。十月二五日、輝弘は茶臼山で自刃。輝弘を失ったことにより、大内氏の正当な血筋を引く者がいなくなり、中世領主としての大内家は名実共に滅亡した。なお、系図によれば、輝弘には武弘・塩童・乙童の三人の男子がいたが、幼い二人は山口で殺され、武弘については不明である。

「毛利輝元」によると、関白豊臣秀次が失脚した文禄四年(1595)七月の起請文前書案に豊臣秀吉・秀頼を補佐する体制として東国を家康、西国を輝元と小早川隆景が統括する構想を示し、秀吉の死没直前に、「毛利表裏事、本武者と思し召さるの由候」と伝わる。がしかし、

豊臣恩顧の大名と徳川加担の大名が関ヶ原の地で対峙。

「下松市史」によると、慶長五年(1600)、関ヶ原の役で西側に与した毛利家は防長二州に減封された。宗藩に次ぐ支藩の長府・下松(東豊井村・西豊井村・生野屋村・河内村(後年、河内村から来卷村分離)・山田村・瀬戸村・温見村・大藤谷村・島田村(現光市))・清末の各毛利家と、これに準ずる岩国吉川家。本藩の直属家臣としての家格を認め、宍戸(元就の女婿)・右田毛利・厚狭毛利・吉敷毛利・阿川毛利・大野毛利(津和野の吉見広行が出奔したため、吉川広家の養子をして吉見彦次郎正春と名乗らせ、後に毛利就頼を賜る)の六家と、永代家老としてこれに準ずる待遇を受けた益田・福原両家があった。これら八家を総称して一門八家と呼んだ。これ等の基本構想は宗瑞(徳川幕府の示唆により、輝元は出家、宗瑞幻庵を名乗る)の意向。なお、中国八ヶ国太守であった毛利元就の時代。下松藩、後の徳山藩となる地の河内村(当時は来卷村含む)から岩田村(現光市)迄、

福原家の知行地だったが、来卷村には菩提寺の仏頂山満願寺があり、知行地替に伴い廃寺となり、梵幢は、光井村（現光市）の満願寺に引き継がれて、現在に至る。

「長井雅樂」小山良昌氏講演によると、

文久元年（1861）、長井雅樂の「航海遠略説」は、徳川幕府のみならず朝廷からも期待されたが、藩論が一変して自決。

「長州ファイブ」一坂太郎氏講演によると、

文久三年（1863）長州藩は留学生五人を英国に派遣。「吉川経幹」小山良昌氏講演によると、

毛利敬親公から、徳川幕府や朝廷との周旋を依頼された吉川経幹。文久三年（1863）二月、敬親公は京都からの帰途、突然岩国を訪問して、吉川家の城主格への昇格を約束し、経幹の三男重吉三才の敬親との養子縁組を約束。

元治元年（1864）七月、禁門（蛤御門）の変。

三家老（益田右衛門介は徳山藩内で・福原越後は岩国藩

内・国司信濃は徳山藩内で伏死・謝罪（三家老の首級は、幕府代表・勝海舟が宮島で検分）。

同年（1864）一二月、高杉晋作は巧山寺奇兵隊率兵

「山縣有朋と奇兵隊」山田文雄氏講演によると、元治同年（1864）一二月一日、大田・絵堂で萩本藩と奇兵隊の戦い（長州藩兵と奇兵隊が相見え、長州藩兵は霧散）。

「長防臣民合議書」（山口県立図書館蔵）によると、慶応元年（1865）四月、第二次長州征討（四境戦争）の前夜、幕府・小笠原壹岐守が広島に下向、長州藩主名代・井原主計が交渉。その際、宍戸備後助が起稿した「長防臣民合議書」は、元治二年（1865）乙丑十有一月三六万部印刷（実際には数千部!）して三百諸侯に配布されたと伝わる。

慶応二年（1866）一月、薩長同盟の締結。二月、幕府は、第二次長州征討軍を解いた。

慶応三年（1867）一〇月、討幕の密勅が薩長へ。

鳥羽・伏見の戦いから、戊辰戦争始まる。

慶応四年（1868）五月二日、長岡藩（河井継之助）と西軍（官軍）の会談は決裂し、奥羽越列藩同盟との戦い。慶応四年三月、朝廷は「吉川監物を毛利敬親の末家と為す」沙汰書。岩国藩は許可された。

明治元年（1868）敬親公は監物の逝去を秘して、監物の末家承認を朝廷へ上申。

明治二年（1869）五月一日、五稜郭の榎本武揚降伏。一二月三日、奇兵隊並びに諸隊反乱。

月刊まるごと周南「矢嶋作郎」によると、天保十年（1839）徳山藩士・伊藤三郎治の次男として生まれ、幼名は泰之進。後に湊。

当時、長州藩内は「正義派（尊皇派）」と「俗論派（保守派）」に二分されており、徳山藩（藩主・元蕃）も、本藩同様二分していた。

伊藤家は、「徳山殉難七士（本城清・新田作太夫・江村彦之進・河田佳藏・浅見安之丞・井上唯一・児玉次郎

彦）」の中、四人と親戚関係にあった。

泰之進も長じて和歌や漢文を学ぶことを理由に、徳山藩内の正義派として活動していたが、幕末動乱期の何時何所で捕えられたか不明であるが、「板倉藩（備中松山藩主）」江戸屋敷に幽閉されており、徳山殉難七士が次々と捕縛・暗殺されながらも、保守派主塊の徳山藩家老・富山源次郎の手も届かなかった。

「矢嶋作郎」と下松

下松市広報（潮騒）「矢嶋作郎」によると、明治元年（1868）徳山藩・毛利元功（二〇代当主）のイギリス留学に際し、伊藤湊こと矢嶋作郎は（日本の国号「大八州国を表し、作郎はそれを作る漢（おとこ）」郎と自ら名乗り）補佐役として、随行している。六年間のロンドン滞在中に、経済学、銀行業務、電気事業などを学んだ。明治五年（1872）に帰途、ドイツ・フランクフル

トのビー・トンドルフ・ナウマン社で日本紙幣印刷の監督。帰国後は大蔵省紙幣寮（現造幣局）に任命され、紙

幣印刷設備設計建設に際し、イタリア・ビー・トンドルフ・ナウマンを招聘。

二年後、実業界に転身。東京貯蓄銀行（現三菱UFJ銀行の一社）設立、大阪紡績会社（現東洋紡株式会社）発起人にも名を連ねた。

明治一五年（1882）、東京電燈会社（現東京電力株式会社）を設立。社長となり、続いて、神戸や京都にも電燈会社を設立した。

一方、東京訓盲啞院を設立、東京正則英語学校を創立するなど、社会福祉事業や教育界にも足績を残している。

明治二四年（1891）、帝國議事堂全焼。ガス灯から電気への移行の妨げになりかねないと、東京電燈会社社長以下、全役員が退任。下松の宮ノ州に住居を移した。作郎が所有した土地は約二〇万坪と言われ、塩田を含んだ広大なものであった。衆議院議員も務め、晩年は和歌「名月会」を主宰、明治三七年（1904）から、歌集「桂露」発刊・毎月（会員赤松照幢（徳応寺住職・与謝野鉄幹の実兄）。さらには中山三屋の三十三回忌（明治四〇年）

に際し、矢嶋作郎が作品を収集・高崎正風選歌「中山三屋の遺詠集 浮木廻亀」を発刊。

矢嶋邸（徳山藩当時、磯部家所有の土地・建物（小嶋磯部・宮浦・宮ノ州・宮ノ州新田を譲り受けた三千余坪の大邸宅）は、現株式会社日立製作所笠戸事業所・現日本石油株式会社下松油槽所・現東洋鋼板株式会社等の敷地。

灯明台は、州鼻と笠戸島本浦との瀬戸を航行する船のために、矢嶋作郎が寄贈したもの（現・鶴ヶ浜に移設）。

矢島専平（専平の考えで、矢島と登記）は、熊毛郡島田村（現光市島田）村長・小倉家の三男として明治九年（1876）三月に生まれ、陸軍士官学校卒業後、矢嶋作郎の長女幸子と結婚、養子入りし陸軍大尉として日露戦争に出征した。退役後は下松銀行取締役を経て、大正十一年（1922）頭取となる。前後するが、大正六年（1917）久原房之助くはらの下松大工業都市建設計画に賛同し、後述の上原乙治（地権者代表）と協力して用地買収に協力。大正九年（1920）五月に衆議院議員に

選ばれ、大正一三年（1924）一月の解散まで議員活動をした。昭和三十年（1955）六月十七日逝去。

なお、下松市立図書館では、下松市制80周年記念事業として、市文化財の「デジタルアーカイブ」グレードアップ事業として手記のデジタルアーカイブ化を進めている。

再び、「下松市史」によると、大正六年（1917）春、久原房之助は、神戸市の日本汽船株式会社内で鉄鋼造船地域の設立準備を進めていた。その過程で堀正一や矢島専平（都濃郡島田村村長・小倉家から、陸軍士官学校卒の専平を養子に迎え、矢鳥家とした）らと相談の結果、その地域を下松町に決定した。実は、①久原家旧縁の地（都濃郡下松村の酒造業・藤田半右衛門は非常な勉強家で、何をするのも意欲的でした。そのため下松の老舗で安住していることができなくなり、大望を抱いて藩都・萩の武田酒造家で修業。見込まれて家つきの娘・亀子と縁組、そのまま萩で酒造業を営むこととした。

半右衛門の二男・庄三郎は久原家の養嗣子に入り、その庄三郎の四男・房之助は萩で生まれた（現在の萩市須佐（雄大なホルンフェルスで有名）の代々浦庄屋でした）、②徳山には海軍練炭製造所（後、第三海軍燃料廠）がある、③宮ノ州以北に良港があり、山陽鉄道がある、④下松に山陽電気株式会社と下松銀行がある、⑤塩田地域で工場敷地と労働力が得易い。六月一四日関係町村長等に発表され、各町村議会の同意を得て発表された。このような大規模な計画が進められている途中、第一次世界大戦の軍需品生産のため、米国は九月に鉄網を全面輸出禁止とした。当時、日本の鉄鋼生産は全て軍部に握られ、計画変更を余議なくされた。

地権者団体との会合で侃侃諤諤が重ねられた後、久原房之助は山口県に工業学校設立金を寄付することで妥結。後に宇部と下松に山工（校章の意匠は全く同様）設立。なお、下松山工には、造船科もあったが、後に廃科。一方、北前船で栄えた由宇の島谷汽船・島谷徳三郎や小野造船鉄工所・小野清吉らが、末武南村と笠戸島江の

浦、東繁昌、松ヶ浦払い下げと買収に着手、大阪鉄工所笠戸島船渠を設立。大正九年（1918）一二月から笠戸島船渠株式会社として営業を開始した。

再び、月刊まるごと周南「殉難七士」によると、

長州本藩と徳山支藩の密接な関係抜きにしては次ぎに進めない。立ち入った話ですが、徳山支藩主・元蕃の弟・元徳は長州藩主・敬親公の嗣子となり、福原越後は、徳山支藩主・元蕃の実兄に当たる。

一方、家老・富山源次郎は、保守派の台頭に乗って、聡明な藩主・元蕃公に取り入り、徳山殉難七士（本城清・信田作太夫・江村彦之進・河田佳蔵・浅見安之丞・井上唯一・児玉次郎彦）を次々に捕え暗殺した。

徳山藩士・河田佳蔵は、徳山藩士・林正愛の第二子として生まれ、徳山藩士・河田鉄蔵の養子となった。前記、家老・富山源次郎宅を襲撃するも失敗。岩国・吉川家（前記のとおり、岩国藩の正式認可は明治維新になってから）と連絡をとっていることが吉川家内に広まり通報され、捕えられて浜崎の獄に繋がれ暗殺された。

実は来巻には、徳山藩士・林正愛の親戚（来巻共同墓地には墓三基）が来巻村（当初、徳山藩河内村。後來巻村。現下松市来巻奥迫下）にあり、林宅に潜んでいたという逸話が伝わっている。さらには、陸路説と海路説も飛び交っているが、少なくとも海路説（烏帽子岳裾野の来巻から烏帽子岳（412m）を山越えして、光・浅江の海岸から小舟で岩国（途中、ヨット船外機を用いても大島の瀬戸廻航は不可。まして、小舟では廻上不可）一夜の往復は、難しいと思われる。

慶応元年（1865）四月、第二次長州征討（四境戦争）前夜、幕府・小笠原壹岐守が広島に下向、長州藩主名代・井原主計が交渉。先にもふれた、宍戸備後助が、「長防臣民合議書」なる版刷を配布と伝わる。写りが山口県立図書館に寄贈されている。

「大島口の戦い」一坂太郎氏講演によると、

慶応二年（1866）六月、大島口の戦い

八日、大島の沖に幕府軍艦（長州藩は陸上）

一日、久賀に幕府軍上陸、安下庄に松山海軍上陸

一二日、久賀海戦・丙寅丸（高杉・山田・田中）

一五日、普門寺合戦、国木峠の戦い

一七日、源明峠、三石の戦い、松山海軍引く

一九日、幕府歩兵、久賀上陸、略奪、放火

二〇日、幕府軍は宮島へ移動。以後、長州軍有利

「芸州口の戦い」三宅紹宣聴講資料によると、

同年六月、芸州口の戦い

一四日、越後国高田藩軍大砲方、和木村の寺に三発

高田藩軍、大竹村へ繰出し、大砲四く五発

長州藩軍発砲に高田藩軍も発砲・放火

長州藩軍が三方を囲み、高田藩軍海陸退却

彦根藩軍大小砲発砲・放火

長州藩軍大小砲発砲彦根藩軍東方転陣、烈

戦したが、三方囲まれ三軍を引いた

長州藩大砲損じ、高田藩主と話し退却

長州藩軍は散兵、彦根藩軍は連隊

八月九日、大野村の征長軍は広島撤退

九月二日、軍艦奉行勝海舟は厳島の大小

願寺において長州藩・広沢真臣と井上

馨らと会談し、休戦が締結。

余談ながら、勝海舟は請われて明治新政府に任官した

こと。福沢諭吉は心良しとせず意見したとの逸話も伝わ

っている。

「小倉口の戦い」三宅紹宣氏講演によると、

同年（1866）六月、小倉口の戦い。

八月一日、小倉藩、城を自焼し撤退

休戦後も局地戦継続。（高杉晋作病死）

「石州口の戦い」三宅紹宣聴講資料によると、

同年（1866）六月、石州口の戦い。

七月一六日、浜田藩、城を自焼し撤退

慶応二年（1866）一二月二三日、孝明天皇薨去

慶応三年（1867）一月二三日、国喪

鳥羽伏見の戦い、戊辰戦争へ、

慶応四年（1868）五月二日、長岡藩と官軍の会談決裂。

明治二年（1869）五月一八日、五稜郭・榎本武揚降伏。

同年（1869）二月三日、奇兵隊並びに諸隊反乱。

あとがきにかえて

「徳山藩府 幕末・維新の残照」で辿った事件・事故、まさに、悲喜交交。

一つには、伊藤 湊こと矢嶋作郎が、中央での公職を離れた後、広大な邸宅を拠点に繰り広げた多彩な人脈と交流（明治三十七年（1904）和歌「名月会」をも主宰、歌集「桂露」会員に連なる赤松照幢（徳応寺住職）他）。

今一つは、徳山藩士・林 正愛の第二子として生まれ、徳山藩士・河田鉄蔵の養子となった、徳山藩士・河田佳蔵が、正義派志士と図り、徳山藩家老・富山源次郎宅を襲撃するも失敗の後、岩国・吉川家臣と連絡をとっていた。それは、来卷村（当時、徳山藩河内村から分離した来卷村。現下松市来卷奥迫下）、林宅に潜んでいた（夜毎（大小を腰に）行き来していた、岩国・吉川家臣と行き来していた・・・）と伝わる逸話。

下松市広報「潮騒」平成三〇年（2018）七月号「矢

嶋作郎」他によると、往時の矢嶋邸内水彩画（小林画伯）や写真（林写真館撮影）等々、下松市立図書館に於いて、二回に分けて展示・公開（後、デジタルアーカイブ化）されたことを、ここに付記して、本稿の筆を置く。
徳山から疎開・転入した烏帽子岳（410m）裾野の里にて記す。

【主な参考引用文献・参考引用資料】

下松市史編纂委員会「下松市史 通史編」
徳山市史編纂委員会「徳山市史上・下」

「宮州塩田図」山口県立博物館蔵

徳山市史編纂委員会「徳山市史料中」

西岡まさ子著「武名埋り候とも 周防徳山藩秘史」

吉田紗美子著「沢瀉の紋章の影に」

殉難 150年・徳山七土慰霊祭記念「七人の志士」

徳山藩再興三百年記念「徳山藩改易 徳山藩殉難七土」

近藤清石著「大内氏實録」三坂圭治校訂

岩崎俊彦著「大内氏壁書を読む」大内文化探訪会

岸浩編著「毛利氏八箇国御時代分限帳」

山口県文書館編「萩藩閩録第一～四巻・別巻・遺漏」

時山彌八著「もりのしげり」

岸田裕之著「毛利元就」ミネルヴァ書房

光成進治著「毛利輝元」ミネルヴァ書房

平生町郷土史調査研究会編「白井小介」平生町教育委員会

月刊まるごと周南 2011年2月号「矢嶋作郎」

月刊まるごと周南 2013年3月号「殉難七士」

『殉難百五〇年・徳山七士慰霊祭記念冊子』

三坂圭治監修「月性の研究」月性顕彰会

海原徹著「月性」ミネルヴァ書房

秋田博著「周防人月性 謹んで申す」

月刊まるごと周南 2012年1月号「周防五傑僧と大谷探検隊」

「月性生誕二百年顕彰プロジェクト記念誌」

上田純子編「幕末維新のリアル」吉川弘文館

徳山地方郷土誌37号（投稿）「弘鴻「種蒔の栞」に寄せて」

下松市広報「潮騒」平成三〇年（2018）七月号「矢嶋作郎」

矢島専平著「復刻版秋の夜話」下松市制80周年記念出版

大内文化探訪会・公開講座

「応仁度遣明船をめぐる大内文化一齣」伊藤幸司講演資料

「戦国大名毛利氏と山口」柴原直樹講演資料

「大内氏館跡大友氏館跡勝瑞城館跡」佐藤力講演資料

「義弘・盛見・持世の和歌と連歌」尾崎千佳講演資料

「山口の町割りをした大内弘世」末富延幸講演資料

信友明著「来卷萬覚え書」「来卷郷土史誌」

「国指定史跡 三田尻御茶屋（藩公館・英雲荘）」

「長州ファイブと奇兵隊」一坂太郎講演資料

「維新史回廊構想 おでかけ講座」小山良昌講演資料

宮本常一著「四境の役と周防大島」

四境の役 150周年記念「大島口の戦い」一坂太郎講演資料

四境の役 150周年記念「芸州口の戦い」三宅紹宣講演資料

長門蔵版局「長防臣民合議書」山口県立図書館蔵

「吉川経幹（1829～1867）」小山良昌講演資料

「吉川経幹と幕末の志士」松岡智訓講演資料

「毛利家資料から見た毛利敬親」柴原直樹講演資料

「久原房之助」小山良昌聴講資料

中公新書編集部編「日本史の論点」中公新書

「大内輝弘の挙兵とその影響」和田秀作講演資料

児玉幸多編「日本史年表・地図」吉川弘文館

以上